

第2回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル議事要旨（A班）

開催日時：2025年10月26日（日）9:00～12:00

開催場所：東大阪市役所本庁舎1階多目的ホール

出席者：委員19名

コーディネーター：伊藤伸氏（一般社団法人構想日本総括ディレクター）

ナビゲーター：定野司氏（一般社団法人構想日本特別研究員・東京みらい中学校校長）

1. ナビゲーター定野氏の講義概要

ナビゲーターの定野氏より、「学びの多様化学校（不登校特例校）」の実践を踏まえた講義。

- 不登校の現状認識
 - 不登校は「現象」であり、問題は子ども側ではなく、子どもに「選ばれなくなった」学校側にあると捉え直す必要がある。
 - 不登校には「外に出られない」「学校には行けないが外出はできる」「教室には入れない」など様々なタイプがあり、それぞれに合った支援が必要。
- 東京みらい中学校の取り組み
 - 「子どもに選ばれる学校」をめざし、9時半始業、下駄箱の廃止、中間・期末テストの廃止、生徒が授業を選ぶ「チョイスタイム」の導入など、従来の学校の仕組みを見直している。
 - 様々な専門学校の先生や学生を講師として招き、社会との繋がりを意識した「実践主義」の授業を行っている。
- 夢を実現できるまちづくりへの提案
 - 子どもが「大人になりたい」と思える社会を作ることが重要。
 - そのために東大阪市が「トライアンドチャレンジ」の実践を提案。
 1. 多様な体験：学校や企業、大学が連携し、挑戦する過程を評価する。
 2. 共創の場（夢を形にする場所）：ワークショップや公共施設を活用し、アイデアを出し合える場を作る。
 3. 挑戦を許容する文化：「失敗博覧会」のように、失敗を恐れずに挑戦できる文化を根付かせる。
- 大人の役割
 - 大人は子どもの「好奇心の芽を摘まない」「考える時間を奪わない」ことが大切。
 - 他人と比べる「固定マインドセット」ではなく、過去の自分と比べる「成長マインドセット」を持つことが重要。

- 「壁は乗り越えられる人にしかやっこない」(イチローの言葉)。挑戦はとても重要。

2. 定野氏の講義を踏まえた議論

定野氏の講義を受け、不登校や学校のあり方について意見交換が行われた。

- 不登校・登校しづらい経験
 - 娘が部活動の厳しい環境に馴染めず、一時的に学校に行けなくなり、最終的に転校した。「そこだけが学校じゃない」と娘に伝えた。
 - 朝起きられず遅刻することがあるが、遅刻すると怒られるため余計に行きたくなくなってしまう。
 - 学校に行きたい気持ちと行けない気持ちの間で葛藤しているように感じている。学校側は「昼からでも」「クラブだけでも」と声をかけてくれている(参加者の保護者)。

(定野氏)

- 不登校は突然起きるものであり、理由は根掘り葉掘り聞かず、まず「受容してあげる」ことが重要。
 - 東京みらい中学校では遅刻してきた生徒に対しても「よく来たね」と声をかけている。
 - 宿題は「言われてやる」より「自分からやろう」と思うことが重要で、東京みらい中学校では夏休みの宿題も提出を求めている。
※中学校は義務教育のため、学校に行かなくても「退学」にはならず、卒業年数が来ると不登校であっても卒業資格が得られる。
 - 支援体制に関して、東京みらい中学校にはスクールカウンセラーが常駐しているが、公立校では巡回が一般的で常駐は稀である。
- 選択肢の重要性
 - オンラインで学べる「選択肢」があったことで、東京でのインターンシップなど新たな挑戦ができた。

3. それぞれの夢について

「夢をかなえられるまちづくり」というテーマに関連し、参加者それぞれが自身の夢や目標を語った。

- 学生の夢
 - 以前は収入が高いという理由で「医者」になりたかったが、忙しいと思いついて考え直した。今は特にない。
 - 万博のヘルスケアパビリオンがきっかけで科学に興味を持ち、今は「理科の教師」になりたい。

- 大学で薬学部に入り「薬剤師」か「麻薬取締官」になりたい。AIの発展を見据え、ロボットに代替されない麻薬取締官に魅力を感じている。
 - 特に夢はないが、大人になったら「稼げる場所」で働きたい。
 - 好きな芸人さんがいて、幼少期からお笑いが好きのため「お笑い芸人」になりたい。中学卒業後はエンタメ関係の高校に入りたいと具体的に考えている。
 - 元々「警察官」をめざしていたが、身体的事情により運転免許が取れないため断念。今は「1回考え直す機会」と捉えている。
- 大人の夢・目標
 - 中高生の頃から「自分の家（一軒家）」が欲しいという夢があり、収入を増やすために転職活動もしている。
 - 仕事（人工呼吸器の販売営業）で「扱っている商品を広げていきたい」。患者や家族、医療スタッフに貢献できることがやりがい。
 - 今の会社が精神的に安定して働ける環境であるため、「今の会社で定年まで働いて出世すること」。会社の役に立てる資格も取りたい。
 - ご家族の医療的ケアに関する悩みを抱えており、同じような状況の人が悩みを共有できる「家族会」のような場（コミュニティ）が必要だと感じている。
 - 夢は「ワクワクドキドキできる」何か（発見、成長）を見つけること。
 - 夢がない場合の対策
 - 夢がない場合は「(多様な)人と話す機会を増やす」「本を読む」ことなどで刺激を受けることが重要。
 - 職業とは別に音楽制作が趣味。子どもが報酬を得て「受注」を体験できるなど、クリエイティブな職業に「触れる機会」を増やす仕組み（子ども限定の公募など）があればよいのでは。

4. その他の議論（病院・街灯について）

会議冒頭で、前回出された課題（病院と街灯）について、市担当者から現状説明と質疑応答が行われた。

6. コーディネーターまとめ

- 本日の定野氏の話や、通信制高校を卒業した本会議スタッフの話から、「選択肢を増やす」ことが重要。
- 「学校に行きたくない」も「勉強を頑張る」も、どちらも価値観として認められるべきであり、「価値観が多様である」という価値観を誰もが持つことが、子どもの夢を叶えられる東大阪に繋がるのではないかと。

- 大人は子どもの好奇心の芽を摘まないことが大切。時には大人は我慢することも必要である。
- 次回は、これらの夢を具体的に実現するための「計画」として、何を変えていくべきか、具体的な方法論を議論していく。

第2回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル議事要旨（B班）

開催日時：2025年10月26日（日）9:00～12:00

開催場所：東大阪市役所本庁舎1階ロビー

出席者：委員21名

コーディネーター：林恵子氏（NPO法人ブリッジフォースマイル理事長）

【周囲からの否定と理解不足】夢への挑戦を阻む言葉と決めつけ

子どもが夢を諦める大きなきっかけとして、親や友人、先生など身近な人からの否定的な言葉が挙げられた。「あなたには無理」「現実を見なさい」といった言葉や、本人の気持ちを無視した決めつけ（職業選択の強要など）が、挑戦する意欲を削ぎ、絶望感につながるものが指摘された。また、信頼していた人に裏切られた経験も、夢を諦める大きな要因となりうるとの意見が出された。

【教育システムと社会規範】早期進路決定のプレッシャーと失敗への不寛容

学校教育において、早期から具体的な職業を意識させ、進路選択を迫る風潮が、かえって子どもたちの可能性を狭め、夢を持つことへのプレッシャーになっているのではないかという問題提起があった。また、親や社会全体が失敗を恐れるあまり、子どもに安全な道を選ばせようとする傾向（過保護）や失敗体験から学ぶ機会を奪っている可能性も指摘された。

【体験機会・ロールモデルの不足】夢を見つける「きっかけ」と現実を知る場の欠如

夢を持つためには、その夢を実現している人の姿を実際に見たり、直接話を聞いたりする体験が重要であるとの意見が出された。しかし、学校での職業体験は限られており、身近に多様な夢を持つ大人が少ないため、子どもたちが夢を見つける「きっかけ」や、夢と現実のギャップを知る機会が不足している。親が働く姿を見る機会の減少も影響している可能性がある。

【情報過多と早期の現実認知】ネット社会がもたらす夢の希薄化と挑戦意欲の低下

インターネットやスマートフォンの普及により、様々な情報に容易にアクセスできるようになったことが、逆に夢を持つことを阻害しているという意見が多く出された。多様な選択肢を知ることができる反面、夢の実現の難しさ（学力、経済力、競争率など）に関する情報も溢れており、挑戦する前から「無理だ」と諦めてしまう傾向がある。また、手軽な娯楽（スマホゲーム、SNSなど）に満足し、壮大な夢や目標を持つ意欲自体が失われているのではないかとの指摘もあった。

【経済格差と支援不足】夢への挑戦を妨げる経済的制約と情報へのアクセス

家庭の経済状況によって、進学や習い事、スポーツ活動などが制限され、夢への挑戦自体が困難になる現実が改めて強調された。公的な支援制度が存在するとしても、その情報が必要な家庭に届いていなかったり、支援を受けることへの心理的なハードルがあったりする可能性も示唆された。部活動の地域移行が進む中で、指導者の確保や保護者の負担増といった新たな課題も指摘された。

【自己肯定感と性の課題】自分を大切にすることの難しさと性教育の遅れ

自分自身を大切に思う気持ち（自己肯定感）が低いと、夢を持つ意欲も湧きにくいのではないかとの意見が出された。特に、日本の性教育が遅れており、性がタブー視される風潮が根強いことが、子どもたちが自己肯定感を育み、自分自身を大切にすることを学ぶ上で大きな課題となっているという切実な意見が出された。望まない妊娠や性被害など、深刻な問題に繋がる可能性も指摘された。

➤ コーディネーターによるまとめ

今回のワークショップで出た意見よりまとめた「子どもが夢を持つ上での課題」とは、「子どもの安心安全を保障する環境が整っていないこと」「不十分な学校教育の体制であること」「体験機会の不足」「情報社会におけるネットやSNSの悪影響」「地域コミュニティの結束力の低下」「大人たちの姿勢や声掛けが子どもに寄り添ったものではないこと」である。家庭、学校、社会、情報環境など、多岐にわたる視点から活発な意見交換が行われた。特に、経済的な格差、ネット情報の影響、いじめや孤立の問題、そして大人の関わり方（過干渉、無関心、ロールモデル不在など）といった、現代社会が抱える根深い課題が、子どもたちの夢の実現を阻む複合的な要因となっていることが浮き彫りになった。一方で、困難な状況の中でも具体的な夢を持つ参加者や、性教育の重要性など、新たな視点からの問題提起もあり、課題の多様性と深刻さが共有された。

次回（第3回）は、今回洗い出された「夢を持ってない理由」を踏まえ、「子どもたちが夢を持ち、それを叶えるために必要なことは何か」という、より建設的で前向きなテーマについて、具体的な解決策やアイデアを議論していく予定である。参加者には、東大阪市の既存の取り組みを参考にしつつ、自由な発想で考えてきてもらうこととなった。